秋期福音特別集会　第1回集会（京都）

# 福音的実存――マルコ伝おけるキリストの行為
## ――マルコ伝第6、10、13、14、15章――

１９８６年11月８日夜
小池辰雄

十二召団　うわぎを脱ぎ捨て躍り上りて　ゆけ、汝の信行なんじを救えり　行言一如　クリスチャンでなく天国体　主さま！　アーメン　十字架は聖霊によって負える　静動一如　祈り

【マルコ6】

1斯て其処をいで、己が郷に到り給いしに、弟子たちも従えり。2安息日になりて、会堂にて教え始め給いしに、聞きたる多くのもの驚きて言う『この人は此等のことを何処より得しぞ、此の人の授けられたる智慧は何ぞ、その手にて為す斯のごとき能力あるわざは何ぞ。3此の人は木匠にして、マリヤの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ならずや、その姉妹も此処に我らと共におるに非ずや』遂に彼に躓けり。4イエス彼らに言いたもう『預言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』

【マルコ10】

46斯て彼らエリコに到る。イエスその弟子たち及び大なる群衆と共に、エリコを出でたもう時、テマイの子バルテマイという盲目の乞食、路の傍に坐しおりしが、47ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言う『ダビデの子イエスよ、我を憫みたまえ』48多くの人かれを禁めて黙さしめんとしたれど、増々叫びて『ダビデの子よ、我を憫みたまえ』と言う。49イエス立ち止まりて『かれを呼べ』と言い給えば、人々盲人を呼びて言う『心安かれ、起て、なんじを呼びたもう』50盲人うわぎを脱ぎ捨て、躍り上りて、イエスの許に来りしに、51イエス答えて言い給う『わが汝に何を為さんことを望むか』盲人いう『わが師よ、見えんことなり』52イエス彼に『ゆけ、汝の信仰なんじを救えり』と言い給えば、直ちに見ることを得、イエスに従いて途を往けり。

【マルコ13】

1イエス宮を出で給うとき、弟子の一人いう『師よ、見給え、これらの石、これらの建造物、いかに盛んならずや』2イエス言い給う『なんじ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずしては石の上に残らじ』……5イエス語り出で給う『なんじら人の子に惑わされぬように心せよ。6多くの

者わが名を冒し来り「われは夫なり」と言いて多くの人を惑わさん。7戦争と戦争の噂とを聞くとき懼るな、斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。……
10斯て福音は先ずもろもろの国人に宣伝えらるべし。……
19その日は患難の日なればなり。神の万物を造り給いし開闢より今に至るまで、斯る患難はなく、また後にもなからん。20主その日を少なくし給わずば、救わるる者、一人だになからん。
【マルコ14】
60爰に大祭司、中に立ちイエスに問いて言う『なんじ何をも答えぬか、此の人々の立つる証拠は如何に』61然れどイエス黙して何をも答え給わず。大祭司ふたたび問いて言う『なんじは頌むべきものの子なるか』62イエス言い給う『われは夫なり、汝ら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲の中にありて来るを見ん』
【マルコ15】
37イエス、大声をいだして息絶えたもう。38至聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。

## ●十二召団

こんばんは。恵まれた者は神さまから使命を賜っている。それでなければ、恵みが恵みでなくなる。この「十二召団」と言いましても、「十二」は、数に私はこだわっているのではないので、いくつであろうといい。我々は、枠がない。キリストがどこでも人を救われたように、いたるところに隣人がいる。これは人間の計画でなくて、キリストに圧倒されると、そのようなことにならざるを得ない。これは本当です。

今、ガンジーのお話が出ましたが、彼は本当に東洋のキリスト的な人です。スタンレー・ジョーンズ（Eli Stanley Jones、1884～1973、アメリカのメソジスト派の宣教師）という人が、『インドへの途上』という本を書いてます。あの人はインドのために命を捧げて、あちらで死んだ人ですけれども。

いわゆるクリスチャンは多い。私はもう「クリスチャン」という言葉はいやになった。

「本当にキリスト的なひと、それを望む」

というようなこともその中に書いてある。彼はガンジーにでっくわしている。本当にガンジーはインドを救った。祈りと断食が全く一つであった人です。

「捨身のガンジーにおいて十字架を見た」

というようなことが書いてあります。正直、今、我々に課せられた使命は――これは男でも女でも、老いたるも若きも――それぞれのっぴきならない課題を負っているわけです。

それでなければ、本当に「聖霊の群れ」ということは口にすべきでなくなる。

## ●うわぎを脱ぎ捨て躍り上りて

マルコ伝を開きます。福音は何度同じところを読んでも、新しいわけです。古びない新しさです。今日は、マルコ伝の10章46節から。この記事はバルテマイの記事ですが、マタイ伝は20章、ルカ伝は18章に出ています。非常に大事な出来事です。

「46**斯(かく)て彼らエリコに到(いた)る。イエスその弟子たち及び大(おおい)なる群衆と共に、**

もう群衆が付いて来てしょうがないんだな。

**エリコを出でたもう時、テマイの子バルテマイ**

「バル」というのは「子」という意味です。

**という盲目(めしい)の乞食(こつじき)、路(みち)の傍(かたえ)に坐しおりしが、**

使徒行伝ではペテロが跛者にでっくわしましたが、これは盲人。

47**ナザレのイエスなりと聞き、**

評判が高いですから、

**叫び出して言う**

叫ぶ、

**『ダビデの子イエスよ、我を憫(あわれ)みたまえ』**48**多くの人かれを禁(いまし)めて黙(もだ)さしめんとしたれど、**

「なぜ、そんなに叫ぶか」

と。ということは、「ダビデの子」という言い方は「メシヤ」を意味するので、これは官憲には非常に気に障る言葉です。

**増々(ますます)叫びて『ダビデの子よ、我を憫みたまえ』と言う。**

もう必死的な叫びです。

49**イエス立ち止まりて『かれを呼べ』と言い給えば、人々盲人(めしい)を呼びて言う『心安かれ、起(た)て、なんじを呼びたもう』**

そう聞いて非常にうれしくなって、この盲人は、

50**盲人うわぎを脱ぎ捨て、躍り上(あが)りて、イエスの許に来りしに、**

もちろん、誰かに連れられたんでしょうけれども。

**「うわぎを脱ぎ捨て躍り上がりて」**

という、本当に見るがごとく劇的に書いてある。彼の歓びの度合いがよくわかります。うわぎを脱ぎ捨ててイエスに向かっていく。

**イエス答えて言い給う『わが汝に何を為(な)さんことを望むか』盲人いう『わが師よ、見えんことなり』**

「先生（ラボニ）、見えたいです」

と。一番切実な願いですね。私たちにとってこの「見えんことなり」とは何事であるか。

「**こんなにお前たちと一緒にいるのに、まだ私がわからんか**」

と、ピリポにキリストは言われた。「父を示せ」と言われて。

「**我を見し者は父を見しなり**」

と。我々はイエスにおいてキリストを見、また神を見る。本当に福音書にぶつかって、

「見えました！　あなたが見えました！」

と言う時には、実はキリストの前に降参している時、平伏している時です。そして、キリストに捕まえられている。もう人ごとではない。

「誰がどうだ、なんだかんだ」

ではない。我々一人びとりがキリストと一対一の真剣勝負。私はよく

「圧倒される」

と言いますが、本当に圧倒されているんです。だから、力が来る。こわいものはないです、正直。ありがたくてしょうがない。

## ●ゆけ、汝の信行なんじを救えり

盲人が「見えんことなり」と切実に言ったら、キリストが、

52 **イエス彼に『ゆけ、汝の信仰なんじを救えり』と言い給えば、**

「ゆけ、汝の信仰なんじを救えり」

と。この

「**ゆけ**」

が驚いた。見えない人に

「行け」

ときたです。

「汝の信仰」

を私は

「汝の信行」

と書きました。即ち、キリストを信じて、彼はうわぎを脱ぎ捨て躍り上がって行ったではないですか。だから、あのバルテマイのその行為はまさにこの「信行（しんこう）」なんです。これがです。

「**汝の信行なんじを救えり**」

「お前は私に向かってそれほどまでに百％にやって来たか」と。

「**我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず**」

という。

「横を見ているのではない、真っ正面にキリストを見て行け」

と。それが「汝の信行なんじを救えり」です。「汝の信行」というのは、

「汝がかくも私に向かって立ち向かった、そのことによって私の力が百％にお前にいくぞ」

ということ。信仰そのものに力があるのではない。信仰は無力なんだ。ただもう捨て身で行くわけだ。歩けなければぶっ倒れる。ぶっ倒れたってかまわない。これが、

「私の力がお前の中に入る。私はお前を救わざるを得ない」

と。それが、

**「汝の信行なんじを救えり」**

の、キリストの本当の言葉はそこなんです。

こういう言葉を聞くと、また間違えるんですよ。

「私の信仰はまだ救いまでにいくほどの強いものではなくて……」

なんて、今度は信仰に凝り固まると、これはくたびれてしまってダメです。そんな信念ではない。空っぽです。そういうのが、この「汝の信仰なんじを救えり」です。

まぁキリストはたいへんな人ですよ。ええ、そうじゃないですか。

**直ちに見ることを得、イエスに従いて途を往けり。**」（マルコ10・46～52）

と。まぁたいへんだ。こういうところを描いている絵があるかね。絵の才能のある人は本当に聖霊の力でグッグッと描いてごらんよ。うまいまずいではない。気魄だ。

これがまさに信即行の世界だ。特にマルコ伝は非常に行動的な福音書です。私は特に著しいところを、こちらに来る前にあげておいた。

マルコ伝3章1～6節は「**手をのべよ**」、

4章35～41節は「**黙せ静まれ**」、

5章21～24節、35～43節は「**タリタ、クミ**」

のところだね。

## ●行言一如

6章1節から見てみましょう。

「1**斯て其処をいで、己が郷に到り給いしに、弟子たちも従えり。2安息日になりて、会堂にて教え始め給いしに、聞きたる多くのもの驚きて言う**

それは驚くんだ。

**『この人は此等のことを何処より得しぞ、此の人の授けられたる智慧は何ぞ、その手にて為す斯のごとき能力あるわざは何ぞ。**

これは全くそうなんだ。まさにワンダフルだ。

「知恵はなんぞ、力はなんぞ、教えはなんぞ」

と。それはお釈迦さんがいくらあれでも、キリストにはかなわん。私は、ソネットの第6

ではそのことを書くつもりです。キリストは絶対に他のものと比較できない。仏教徒に何といわれようとかまわない。私はもちろん、お釈迦さんも尊敬しますし、一流の坊さんも尊敬します、無条件に。けれども、このキリストはとても表現できない。もう

「主さま！」

と一言いえば、直ちにその世界に入る。あなた方、全身で祈りの世界で、自分で本当に沈黙の雄叫びをしてごらん。もうその中に入って全身震えるから。絶対に行きつまりません、いついずこにおいても。

「まだ私の信仰は……」

なんて、「私の信仰」なんて思っているからいかん。そんものは何もない。

これはナザレの連中は躓いているわけだ。

**3 此の人は木匠にして、マリヤの子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ならずや、その姉妹も此処に我らと共におるに非ずや』遂に彼に躓けり。**

まぁ言いそうなことだよね、いわゆる親しい人たちは。

**4 イエス彼らに言いたもう『預言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』（マルコ6・1～4）**

「おのが郷、おのが親族、おのが家では尊ばれない」

という。

「家の者は敵である」

という言葉がある。しかし、キリストの烈しい言葉は、驚くべき光と生命と愛の世界ですから。この烈しい言葉が逆にもの凄い力になり、ありがたくてしょうがない。だから、福音なんだよ。そういう意味で本当に福音を捕まえているか、捕まえられているか。大方のクリスチャンはそうでないですね。もったいぶっている。体裁、アクセサリーだ。キリスト召団のあなた方一人びとりは本当にキリストを着て進む。パウロが、

**「キリストを着ろ」**

と言った。いろんなことにでっくわせばでっくわすほど逆に力がきます。これは本当です。だから、ありがたくてしょうがない。聖霊のこのキリストに代えるものは一つもない。私は福音書をみんな一つずつ別に綴じてある。これはポケットでもどこでも入るから。

**「福音のためには狂えるなり」**

という。この6章のキリストの姿に、

「参りました！」

と言わなくては。その知恵に参りました、その力に参りましたと。そこに平伏してしまう。そうしたら、キリストはつかまえてくださる。

マルコ伝の5章のところは、例の

**「タリタ、クミ！」（少女よ、起きよ）**

の、死人の甦りのところです。『無者キリスト』（小池辰雄著作集第1巻、１９７５年刊）の中に書いてあります。

6章50節は、

**「心安かれ、我なり、懼(おそ)るな」**

という、湖上を歩いてきたキリスト。凄いね。

「私だよ、おそれるな」

と。これは我々の日常生活での大事な言葉だな。なにしろ、湖の上を渉ってくるような、物理法則を乗り越えているひとだから。それを何のかんの言うんだね、神学者だとか、聖書註解者だとかは。あんなものは読む必要はないですよ。まぁ、ベンゲルのものはなかなかいいですが。

マルコ伝9章では、今度は行為でなくて、彼の全身が変貌してしまった。なにしろ全部、身体(からだ)をもって彼は現している。何も説明しない。全部、身体(からだ)で現している。行動で。

**「わが言(ことば)は霊なり、生命(いのち)なり」**

と。キリストが言えば、跛者が立ったり、目が開いてしまったり、大変なひとですね。言行全く一如のひとですね。私はこの頃、「言行(げんぎょう)」と言いたくない。

「行言(ぎょうげん)」

と言いたい。行為が先です。行言一如。キリストはまさに行言一如のひと。行為に裏付けられていない言葉は一つもない。

それはもちろん、マタイ、マルコ、ルカは全部、聖霊の世界です。ただマルコ伝は非常に行の面がはっきり出ているし、明日やるマタイ伝は言の面が非常に出ている。ルカ伝は心の面。おもしろいですね、行・言・心と。そして、ヨハネ伝が霊ときている。もちろん全部、霊ですけれども、この福音書というのは不思議なことになっているね。

ルカ伝14章の1節から9節は例の

**「ナルドの香油」**

だ。壺をぶち割って高価な香油を全部キリストにぶちまけた。これが本当の、この女性の信の行なんだ。生命をそのままキリストに投げかけたのと同じことです。

**「全世界に伝えられる」**

とキリストは言われた。この女性は、キリストの捨て身の愛に対して捨て身の愛をもって進んで行った。

## ●クリスチャンでなく天国体

マルコ伝14章60節、

**「60爰(ここ)に大祭司、中に立ちイエスに問いて言う『なんじ何をも答えぬか、此の人々の立つる証拠は如何(いか)に』61然れどイエス黙(もだ)して何をも答え給わず。大祭司ふ**

**たたび問いて言う『なんじは頌(ほ)むべきもの**
神さまのことです。
**の子なるか』[62]イエス言い給う『われは夫(それ)なり、**
いちばん本質的なことを言ったから、「そうだ」と。「アニー　フー」という。
**『われは夫(それ)なり、汝ら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲の中にありて来る**
**を見ん』**
たいへんなことを仰った。これはわからんね、もう再臨の約束だ。キリストの今歩いているこの行動はまさに必死の行です。これは本当は必死でなくて決死だ。この必死はまさに使命の必死です。贖罪の使命の必死。人間はどうにもならん、これが罪です。
「私が救われるならば万人が救われる」
と内村鑑三が言った。まぁそれくらいに内村先生はもちろん十字架をからだで信じられたのでしょう。残念ながら、先生はそこまでが使命だったでしょうから。そこで、パウロのような聖霊の現実を内村先生が展開したら、驚くべきことになったでしょうが、そこがひとつの限界だった。福音はもう次から次へと展開してやまない。
「これでいい」
なんていうところはない。
「内村鑑三の屍体(しかばね)を乗り越えて進んで行く」
と藤井武は言った。私の先生です。私は藤井先生の屍体を乗り越えて進みつつある。あなた方もまた私の屍体を乗り越えて進んでください。
**「汝らは我よりも大いなる業(わざ)をなす。お前たちを通して、私はいよいよ大いな**
**る業をするぞ」**
ということです。まだまだ、そんなことではない。とにかく、この福音をいただいたら、ただではすまされない。みんなそうです、あなた方一人びとりが。ただごとではない。うれしいね、みんなその使命を感ぜざるを得ない。それに生きようとしていないというと、必ずダメになる。また本当に聖霊を受けとって進んでいけば、必ず期せずしていろいろなことをさせられる。小さなことから始まります。大丈夫です。
それで、このマルコ伝は「行の福音」と言いましたが、何といっても、十字架が最大の行です。これはマルコ伝に限らない。もう全福音書に出ているのがこの十字架です。
「十字架行(こう)」
という。イザヤ書53章。イザヤ書は53章がこの十字架の章で、引っくり返した35章が聖霊、天国です。福音書はこのイザヤ書35章をキリストが実証している。53と35というのが――引っくり返した数字でおもしろいけれども――これが黙示録に通ずる。第二イザヤ、福音書、黙示録の終わりの方。この三つが相呼応している。
我々はこの黙示録の現実も既に、

**「天国は汝らのうちにあり」**

ということで、

「私を受けとったところには必ずそこに天国がきている。お前たちはパラダイスの中にいる。どんな惨憺たる現実であっても、そこはパラダイスだ。お前たちはパラダイスを展開していく、天国体であるぞ」

と、こういうわけです。もう「クリスチャン」なんていう言葉はいらない。

「お前は天国体だ。まわりに天国を展開しながら行け」

と。そういう絶対次元の質を我々は身につけてだんだん行こうじゃないですか。行けますから。相対次元の世界に絶対次元が食い込んで爆発しながら。

これは本当の原始力だからね。親指一つの原子力で軍艦一つが動くんだそうだね。いわんや、我々の全存在がキリストの原始力を宿したら、えらいことになる。自分の才能とか何とか、もうそんな相対的なことは問題じゃない。聖霊を本当に受けること、キリストを本当に生きることです。

「われ汝のうちにあり」

という御言をそのまま受けとることです。

「エン・クリスト」（キリストに在って）

は決して空念仏ではない。

**「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」**

**「わが神、わが神、なんぞ私を棄てたまいし」**

と。これは非常に反語的な言葉ですね。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし。私はあなたの御意を完全に行いました、行じました、実存しました」

と。「福音的実存」と題しましたが、この福音的実存というのは聖書を体現すること。キリストが福音的実存を完全にやった。我々は完全なんかとてもできない。ボロボロだ。けれどもいい。どんなに躓いても転んでも、前進あるのみ。何とでも人に言わせておけ。進んで行きなさい。

私は言うんですよ、なにも律法（おきて）で言うわけではないけれども、

「日曜日になぜ集会に来ないか」

と。いろんな事情があって来れないことを、私は決して無理は言わないけれども。

「もう行きたいんですけれども、今日はどうしてもダメです」

とか、どうして電話一本でもかけてこないか。たまに電話がかかってくると、

「お客さんが来るので、今日は集会へ行けません」

なんて。

「なにをぬかすか。お客も一緒に集会に連れてこい」

と言いたくなる。それだけの気魄を持たなくては。私は日曜をなにも律法的に言っているのではない。

「私はどうしてもある人を救わなくてはならないから今日はそっちへ行けません」

「ああ、結構です」

と。キリストが言われたとおり、

「**安息日（あんそくにち）も主たるなり**」

という。とにかく、安息日にキリストの力をあらわすか。本当に集会へ来て、キリストの力を、復活のキリストを受けとって、六日間の原動力を――毎日毎日だって原動力ですが――いただく。そういう気合で私はとにかくここで46年間やってきたんだ。はじめのうちは、そんな気はあまりなかったが、聖霊を受けてからはもうはっきりそうだ。

無教会はよく日曜を守るよ。今はどうだか知らんが。しかし、ただ守っていても、これまたダメなんだな。知らないまに律法（おきて）になっている。そして

「聖書の研究、聖書の研究」

と言ってやっている。気の毒になるね、お葬式みたいで。だいぶ私は口がわるいけれども。塚本先生が言ったもの、

「僕（ぼく）は伝道をちょっと間違えた。手島君や君のが本当だよ。しっかりやってくれ」

と。はっきり覚えている。今度、私は第９巻（『感想と紀行』１９８７年刊）に塚本先生のことを書いたから。無教会の人が驚くかもしれない。先生は勘がいいから、わかるんです。これは言おうか言うまいかということがもう一つあるんだけれども、まぁ言うのはよしておこう。

## ●主さま！　アーメン

御霊があなた方に保証を与える。誰の保証も要らん。

「37**イエス、大声をいだして息絶えたもう。**

と。この「大声をいだして」というのは異言的な声です。だから、

38**至聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり**」（マルコ15・37～38）

と書いてある。もの凄いキリストの霊的な力です。

「**死人が墓から出てきた**」

なんていうことも別なところに書いてある。全く驚天動地だね。人間ばっかりではない。驚天動地。天が驚き地が動く。地震ではないんだ、霊震だから。キリストはたいへんなひとですね。私は

「たいへんなひと」

と言うよりか言いようがないんだ。彼は霊体で甦らざるを得ない。もう全身的な行動です、十字架の贖いは。槍で刺され、血が流れ、預言の通りに三日目の朝に甦った。復活体は、

ルカ伝によれば、お魚を食べたりする。もう、福音書というのは、何度読んでも常に新たに力がくるから。

「こんなことは知っていらぁ。もう読んだ」

なんていう読み方をしたらダメですよ。常に新たに、新たなる響きを、そしてその奥からの――日本語ではない――神の根源語の響きを聞く。私はこうやってしゃべっていると、全身熱い。上着を脱ぎたくなる。さっきもう脱いでしまった。

「集会には今度は出られなくても、講演会だけには来てくださいよ」

と私は言った。歴史的な講演をした。「またやれ」と言ったって、もうできない。

皆さん、本当にもう、

「主さま！」

の一言です。「南無妙法蓮華経」「南無阿弥陀仏」よりももっと短い。「主さま」と。「主よ、主さま」と――「さま」はかなの方がいい――「主さま」の一言です。「主さま」の一言で直ちにキリストと一つにならなくては。

「祈れない」なんてことはひとつもないですよ。最強の祈りはただ「主さま」の一言、「アーメン」と、それだけ。

「主さま！　アーメン」

でいい。さっきのソネットの第5にも私は言ったでしょ。

「アーメンと私は叫んだ」

と。これは前の晩に書いたんだよ。

もう、キリストは本当にたいへんなひとです。だから、お釈迦さんも何もかなわんです、キリストには。説明なんかできる世界ではない。十字架だって説明なんかできない。

ある人が私に、

「先生、私の十字架はまちがっているでしょうか？」

と聞いたよ。私は言いたかったけれども、

「いや、十字架なんてのは説明できないですから、結構ですよ」

と答えた。

もう本当に過去も現在も未来も、「小池」なんていうのはすっ飛んでいる。いないんだ。キリストの無者です。十字架でゼロにされた。「1」は「0」にされた。そうすると、「∞」（無限大）になる（1＝0＝∞）。聖霊のことです。

だから、この御霊のことをパウロがローマ書8章で言った。たいへんな章だ。ローマ書8章はもう若い人は暗記したらいいね。

**「聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」**

と、パウロははっきり言った。

「聖霊とはどういうものですか？」

なんて、「どういうもの」ではないよ。本当に十字架にぶっ倒れて、パウロと一緒に、

「**キリストと共に十字架されたり。もはやわれ生きるにあらず**」

といったら、その次に何がくるかというと、

「**キリストわがうちに在りて生き給うなり**」

というのがやってくる。どうして、そういうことに感激しないかね。

## ●十字架は聖霊によって負える

マルコ伝は行ですが、それは本当にキリストが行じていると同時に、キリストにぶつかっていく者はみなそのようにして動かされていく。そして、十字架がどん底の行で、復活がその天的な輝ける全身の行である。これが、

「**来たりて視よ**」

である。

「来たりて、福音書を視よ、キリストを視よ。キリストにしがみつけ。ぶっ倒されろ、捕まえられろ」

という世界です。祈りの世界でその現実の中に入ってごらん。もう、たいへんなことになるから。

私も、私の兄貴が北京で仆れて、それで、ただで私は生きているわけにはいかない。もう60年も前の話ですが、けれども、決して60年で終わらない。皆さん、いろいろなお一人お一人の体験があるでしょう。それが本当に福音で活かされて、そして、

「私はやるぞ」

ということになるわけです。福音の世界にきて、十字架を負わないことはないです。必ず何かを負わされます。しかし、その十字架は聖霊によって負うことができる。私は讃美歌にうたったでしょ、

「み霊の力で　まことの伝道」

（召団讃歌Ａ25「いずれの教派も」――新宗教改革――1981.5.8作）

と。もう説明にならないから困るんだけれども。

マルコ伝の13章というのは終末の預言です。

「[1]**イエス宮を出で給うとき、弟子の一人いう『師よ、見給え、これらの石、これらの建造物（たてもの）、いかに盛んならずや』**

これはエルサレムの神殿です。おおいに感嘆している。

[2]**イエス言い給う『なんじ此等の大（おおい）なる建造物（たてもの）を見るか、一つの石も崩されずしては石の上に残らじ』**

全部これは崩される。エルサレムの滅亡の預言です。その通りになってしまった。

「それはいつですか？」

なんていうまた問答がある。

**5イエス語り出で給う『なんじら人の子に惑わされぬように心せよ。6多くの者わが名を冒し来り「われは夫なり」と言いて多くの人を惑わさん。**

偽キリストが来るかもしれない。

**7戦争と戦争の噂とを聞くとき懼るな、斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。**

最後の前にこの福音がもうひとつ述べられるということが書いてある。10節、

**10斯て福音は先ずもろもろの国人に宣伝えらるべし。**

この「べし」は強い。「どうしても宣べ伝えられることになるぞ」と。

**「荒す悪むべ者」**

のことがずっと出ている。19節、

**19その日は患難の日なればなり。神の万物を造り給いし開闢より今に至るまで、斯る患難はなく、また後にもなからん。20主その日を少なくし給わずば、救わるる者、一人だになからん。**（マルコ13・1～20）

ときた。

**「末の日に信仰を見んや」**

ともキリストは言われた。キリストは、地上がそのまま天国になるとは思っていらっしゃらない。

皆さん一人びとりが、我々一人びとりが、パウロとなり、ヨハネとなり、ヤコブとなり、ガンジーとなり、ジャンヌ・ダルクとなる。何でもいいですよ。また全然ひとに知られない在り方もある。とにかく、それぞれ本当に生きた人は天国でもって宝石のごとく輝く。

いわゆる善悪ではない。先ほどもちょっとお話しましたけれども。超善悪の世界の、本当のキリストの義の世界、キリストの愛の世界。そういうようなところに本当に魂が坐ってしまうと、もう本当に何といいますかね。どうぞ、まぁ一足飛びになることはないですけれども。

## ●静動一如

それで、さっきもちょっと言ったけれども、

「静中の動」
「動中の静」

ということ。静動が交互に動きますけれども、それの奥の世界は、静の中に動があり、動の中に静がある。そういうようなことになると、これが本当の福音的実存になる。動にこだわっているような動はダメなんです。

だからもし、女性でいうならば、マルタとマリヤと両方がちゃんとあるひと。あるとき

はマルタとなり、あるときはマリヤとなる。それはそのマリヤの中にマルタ的な行動が隠されている。マルタという行動の中にマリヤ的な深い静がござる。そういうような角度になると、これがもう屈託のない世界なんです。そういうような境地になると、本当の動が出てくるわけです。そうでない動は、うっかりすると、つけ刃（やいば）的な動になってしまう。行動の動です。

日本人は、どちらかというと、この静けさの方ですね。仏教が悟りの静かさなんだ。けれども、仏教もキリスト教も――この「教」というのはあまり言いたくないけれども――仏道もキリスト道も渾然としているのが本当の福音の在り方なんです。

福音的実存というのは、キリストがそういうひとだ。深く神さまの中に祈りこめば、徹夜してでも祈りこんでいる。静けさです。そうすると、明け方に湖の上を渡ってくる。もの凄い動だ。あの静の中に動が入っている。この静は祈りの静だから。これは祈入しなければダメです。

禅の方で坐禅とかいうが、私は坐禅なんかしないけれども、福音の世界で坐禅的な境地には楽に入れる。この祈りの世界でじっと坐って祈ってごらん。すごいところにはいる。爆発する、この静は。沈黙で祈っているうちに突然叫びだす。まぁ、人にはいろいろな在り方がありますから、私は一慨には言いませんけれども。

あのヒルティという人が、

「一番望ましき死に方は、社会や国家のために自分を捨て身でもって行動したような死に方だ」

ということを、『人生の諸段階』の中の最後のところで言っている。ヒルティ自身は非常に静かに死んだ人です。娘さんがコーヒーを持ってくるのを、腰掛けて待っていて、来てみたらもう向こう側に往ってしまっていたという。あの静かなヒルティの中にもの凄い動的なものが動いていた。

「人間のつくりだした神学なんてものは蜘蛛（くも）の巣みたいなものだ。神さまの息吹がきたら、そんなものは崩れてしまう」

なんて、おもしろいことを言っているよ、『眠られぬ夜のために』の第2巻のところに。

ナポレオンも言ったでしょ。セントヘレナに流されて最期に、

「福音書は生き物だった。これは文字ではなかった。まいった」

と、ナポレオンはキリストの前に降参した。

「行為的信行」

「信即行」

と、さっきからさんざん言っているけれども、今最後に言った、

「静動一如」

の境地がいちばん大事ですから。これはくたびれないです。静動一如。深い静を持たないと、

また本当の動でなくなるし、動の中に深い静を持たなくてはいかんし。それがちょうど昼と夜と同じことです。我々は昼と夜がなければ生活できない。地球が回っていることも非常にありがたいことです。キリストの中に休ろう。キリストの中に休ろうと、朝は力を得て起き上がる。

「主さま、あなたの中に寝かせてください。あなたの腕を枕にします」

と。私なんかバカだからね、すぐそんな気持でもって寝たりする。私は書斎で寝ている。祈って寝ると、明け方になると不思議な夢を見たりする。

「へぇ〜」

なんて思ったりする。

だから、東西を融合してしまうです、この静動一如からいっても。昼夜をわきまえ、東西を融合する。これはキリストですから。キリストの実存がそれなんです。深い祈りのひとであると同時に、もの凄い行動のひとであるということは、その彼の祈りの実存がそういうようなものだから。福音的実存というより、もちろんキリスト的実存といいたいくらいです。スタンレー・ジョーンズも、

「キリスト教なんて言いたくない。ただキリストと言いたい」

と言った。

では、おしまい。

## ●祈り

祈ります。驚くべき主さま、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、このような福音書が遺(のこ)されて、何をもって讃(たた)えることができましょうか。本当に不思議な世界無比のこの音信です。主さま、どうぞ、私たちは、この福音書の中に本当に身読し、読むことが直ちにあなたの中に入ることであり、読むことが直ちに祈りであり、そのように福音書に、

「我と福音書は一つなり」

との境地にいよいよ入らしめてくださるように願い奉ります。

兄弟姉妹たちはこのように福音の心に接することができ、ありがとうございました。この一人びとりはみな掛け替えのない存在です。どうぞ、あなたの深いおん顧みがこの一人びとりを通してのっぴきならない展開を、福音的展開をしてくださるよう切に願い奉ります。そして本当に、我々はその使命を、躓いても転んでも、やっていきます。そのときに、それが即ち讃美であり、交響楽となってあなたを讃えることであることを信じて、御名を讃え奉ります。

兄弟姉妹たちの今、全身にあふれているところの感謝と讃美と祈りと共に、主イエス・キリストの御名に在りて捧げ奉る。アーメン。